

8 県北高冷地帯における夏まきサヤエンドウの栽植距離（園試高冷地分場）

(1) 背景とねらい

夏まきサヤエンドウは春作野菜の後作として土地の有効利用など輪作体系上有利な面をもち、また市況も比較的高価格で安定しているため栽培面積は増大の傾向にある。しかし現状では極めて低収であることから、立地条件を生かした夏まき作型の生産安定を目的に栽培技術の確立が必要である。品種についてはすでに明らかにされたので栽植距離について検討した。

(2) 技術内容

- (1) 夏まきサヤエンドウの栽植距離は畦幅 100 cm、株間 14 cm、2 本立（10 a 当たり 7143 株）が適当である。
- (2) 適応地域は県北高冷地とする。

(3) 指導上の留意点

- (1) 高温時は種のため発芽不良による欠株を生じやすいので、は種は 3～4 粒まきとし 5～6 cm の深まきとする。またもみがらかオガクズを 2～3 cm の厚さで畦上にまくか敷ワラを行ない乾燥防止と地温低下をはかる。
- (2) 種子消毒を必ず行ない、チウラム水和剤またはベンレート T 20 水和剤で種子重量の 0.3 % を種子粉衣する。
- (3) 密植になるのでうどんこ病などの病害が発生しやすく、また春まきより早まるので病害虫の早期防除を徹底する。

(4) 試験成績の概要

- (1) 試験課題名 夏秋どりサヤエンドウ増収対策試験

〔2〕栽植距離試験

- (2) 試験年次および場所 昭和 52～54 年

岩手県園芸試験場高冷地分場

- (3) 試験方法

① 供試条件

昭和 52 年

昭和 53～54 年

10 a 当たり株数	栽植距離（畦幅×株間）	10 a 当たり株数	栽植距離（畦幅×株間）
5000 株	① 100 × 20 cm 2 本立	5000 株	① 100 × 20 cm 2 本立
5882 株	② 100 × 17 cm 2 本立	7143 株	② 100 × 14 cm 2 本立
5143 株	③ 100 × 14 cm 2 本立	9091 株	③ 100 × 11 cm 2 本立

- ② 供試品種 30日絹莢
- ③ は種期 昭和52年、53年7月11日、昭和54年7月9日
- ④ 施肥量(10a当たりKg) N 18.8、 P O 17.6、 K O 18.8
- ⑤ 面積及び区制 昭和52年 1区6.3~9m²(45株) 2区制
昭和53年、54年 1区9m²(45株) 2区制

(4) 試験結果

① 昭和52年

100×14cmの密植区が最大収量を示し、100×20cmの標準区に対し収量比137と大きく上回った。次いで100×17cm区が100×14cm区には僅かに劣るがほぼ同程度の収量をあげ標準区より35%の増収となり、密植になるに従い増収の傾向を示した。

② 昭和53年

100×14cm区が約503Kgと最も収量が高く標準の100×20cm区に比べ33%の増収を示した。また100×14cm区より密植の100×11cm区は標準区より収量性で上回ったが100×14cm区と同程度の収量にとどまり、密植による増収効果は低かった。

3③ 昭和54年

前年同様100×14cm区が暖秋による収穫期間の延長もあって約661Kgと最大収量を示し標準対比27%の増収であった。前年100×14cm区と同程度の収量をあげた最密植の100×11cm区は標準区を上回ったもののやや劣る傾向が認められ、密植限界に近いと推察され実用的な栽植距離は畦間100cm、株間14cmが適当であると考えられた。

(5) 主要成果の具体的データ

表1 10a当たり収量(欠株補正なし)

年次 試験区	項目	上 莢		曲 莢		く ず 莢		欠株 率(%)	収量(Kg) 上 莢 + 曲 莢	収量 比(対 標準)	等級別割合(重量%)		
		個数	重量	個数	重量	個数	重量				上莢	曲莢	くず莢
昭 52	100×20cm (標準)	141	239.5	13	23.6	10	22.2	28.3	263.1	100	83.9	8.3	7.8
	100×17cm	185	322.5	20	33.3	13	28.6	26.7	355.8	135	83.9	8.7	7.4
	100×14cm	198	326.9	23	33.6	15	32.7	28.3	360.5	137	83.2	8.5	8.3
昭 53	100×20cm	245	356.0	14	21.0	27	41.3	8.3	377.0	100	85.1	5.0	9.9
	100×14cm	232	475.7	18	27.2	27	41.5	7.1	502.9	133	87.4	5.0	7.6
	100×11cm	342	475.7	15	24.3	35	53.8	7.4	500.0	133	85.9	4.4	9.7
昭 54	100×20cm	268	482.2	19	39.0	34	55.2	3.8	521.2	100	83.7	6.8	9.5
	100×14cm	332	601.4	31	59.7	37	63.2	4.5	661.1	127	83.1	8.2	8.7
	100×11cm	315	558.9	24	46.6	46	77.7	4.9	605.5	116	81.8	6.8	11.4

註) 単位: 個数1000、重量Kg

収穫期間(収穫日数) 昭和52年 9月3日~10月18日(45日)

昭和53年 8月28日～10月12日 (45日)

昭和54年 8月24日～10月22日 (59日)

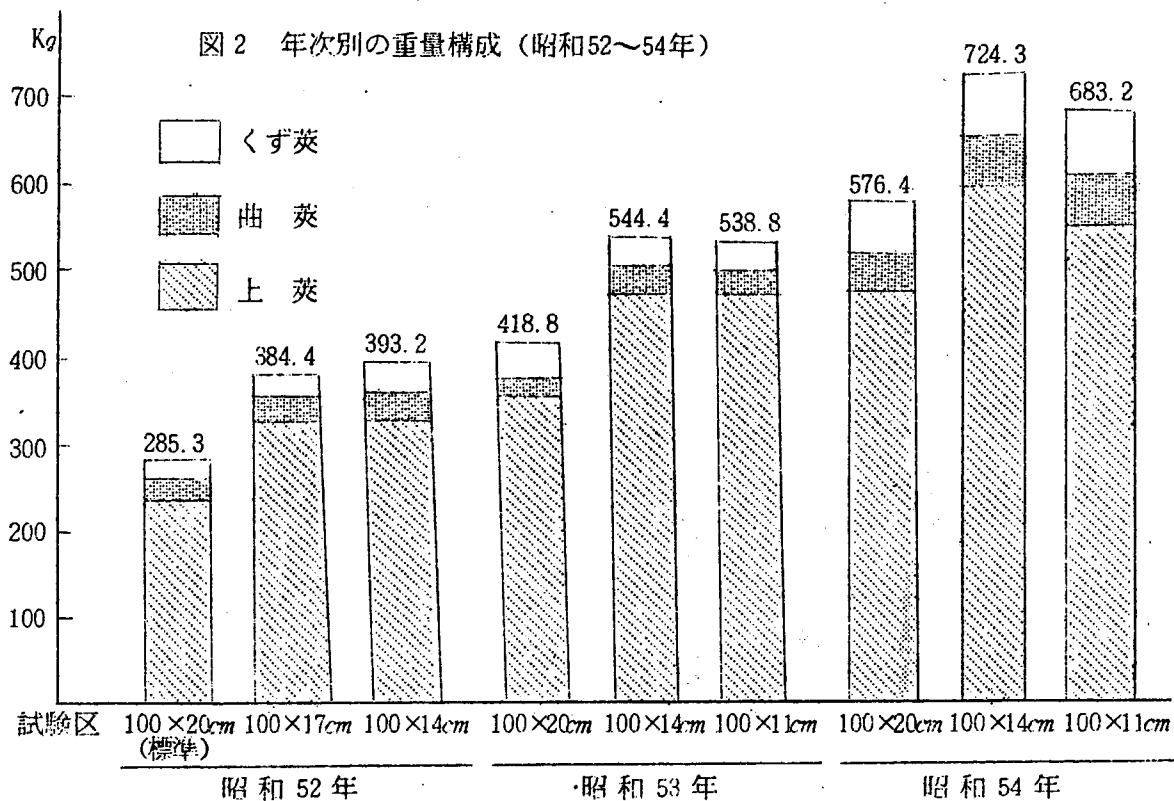
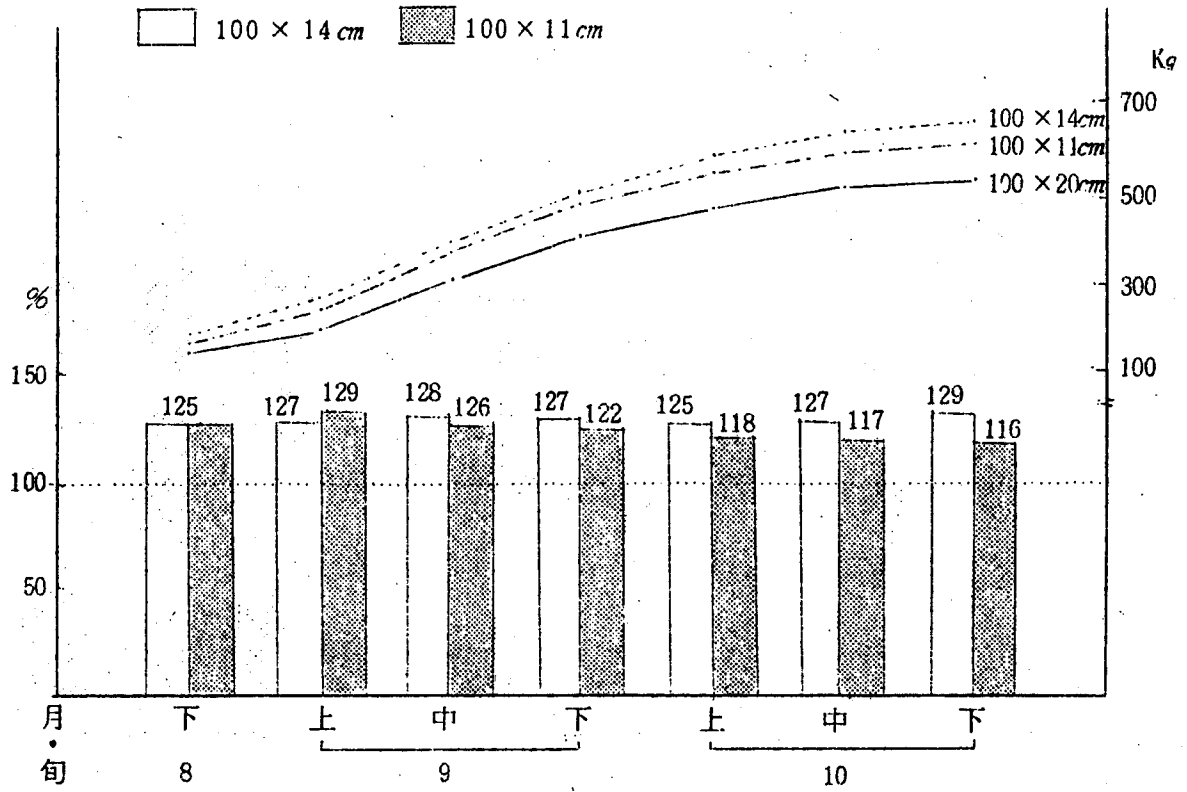


表2 時期別収量 (Kg/10a) 昭和54年

試験区	8月		9月				10月		
	下旬	上旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
100×20cm	135.0	53.7	53.7	113.6	93.8	66.7	42.2	16.2	
100×14cm	169.2	70.1	70.1	148.1	116.3	75.4	60.2	21.8	
100×11cm	168.3	75.1	75.1	138.6	102.9	61.8	41.8	17.0	

図2 時期別収量比（対100×20cm比）と累計収量
昭和54年



(6) 残された問題点

- (1) 密植限界と密植に対応した栽培法
- (2) は種適期の検討
- (3) つる枯性病害の発生要因の追究

(7) 参考資料

- (1) 岩手県園芸試験場高冷地分場試験成績書 昭和52年～54年